26P-pm237

理礼氏薬物学（第一七巻）にみる薬物

◯西野　ゆり[1], 島　和嗣[2], 久保　光平[3], 畠山　貴博[4], 大垣　旭[5], 小松　知貴[5], 澤田　采佳[6], 小松　直登[7], 木村　壮太郎[8], 林　優樹[9], 西野　正雄[10], 菰田　綾佳[11], 宮本　如奈[12], 高倉　弘士[13], 畠山　有理[14], 畠山　光弘[15]（[1]大阪府立長野高校, [2]大阪府立金剛高校, [3]四天王寺羽曳丘高校, [4]初芝富田林高校, [5]大阪府立河南高校, [6]大阪府立西浦高校, [7]大阪府立東住吉高校, [8]大阪府立藤井寺高校, [9]大阪府立富田林高校, [10]早稲田大(基幹理工), [11]関西福祉科学大, [12]同志社大(文), [13]立命館大•院(産業社会), [14]長崎大(薬), [15]畠山獣医科）

「はじめに」・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第十七巻全文を解読し紹介する。

「内容」・・最後の巻、巻十七では緩和薬、潤滑薬、制酸薬そして駆虫薬である。登場している薬品は緩和剤：アカシアゴム、タラガカンタ、楡皮、アマニ（複方アマニ浸、アマニ粉、アマニ油）、甘草（甘草エキス、複方甘草混和剤、甘草阿片錠）、アイスランドモス（アイスランドモス煎）、アイルランドモス、葵根、亜児魯、タピオカ、西穀粉、大麦（大麦煎、麦芽）、澱粉、砂糖（単糖煉、糖蜜、乳糖、蜂蜜）、燕麦粉、魚膠、米。潤滑剤：グリセリン（窒素化グリセリン）、椰子油（カカオ酪）、甘扁桃油、家猪脂（単蝋膏、単軟膏、羊脂など。制酸剤：ポトアス水、ソーダ水、炭酸ソーダ（枯炭酸ソーダ）など）、石灰水、炭酸石灰（沈殿炭酸石灰、精製石粉、石粉混和剤など。駆虫薬：スピゲリア（スピゲリア浸、スピゲリア流動エキス、スピゲリアセンナ流動エキス）、セノポジウム（セノポジウム油、セノポジウム・アムブロシッポテス）、施綿シナ（サントニューム（施綿塩））、綿馬、ペポ、苦楝皮、ミュキュナ、プラエラ、ロットレラ、カジニューム油、錫粉である。

「考察」・・　江戸末期シーボルトが持ち込んだ殺虫剤（寄生虫駆除）としては、アツサハチタ（阿魏），ヲルムサアト，鵠泄蛤尓（ヲッセガル，牛胆），エーセル（剛鉄），ゲンチアナ（リンドウ科植物の根），骨乙機（クイッキ，水銀），阿魏及下越告兒（阿魏製剤）及び亜鉛華があるが、江戸後期とは全く異なる薬が挙げられている。